

家族の心配事

(小さな町の庶民的な部屋)

父(アフラに) ああ、こんなことになるとは、誰も思いもよらなかったろう。

アフラ お父さんのせいじゃないわ。どうしようもなかったのよ。もしお母さんがちょっとはあのことを気にかけていたのなら、ハインリヒは何もしないですんだでしょうに。静かに！ ハインリヒが帰って来たわ。

ハインリヒ ただいま。

父とアフラ おかえり。

ハインリヒ ヨーゼフが戻っている。

父とアフラ いつから？

ハインリヒ お袋は、二日前からだつて言っている。

アフラ 私の言った通りでしょう。でも、みんな信じなかった。

父 あいつ何食わぬ顔をしてるんだな。

ハインリヒ あれでいいのさ。あいつはこういうことには関わらないんだ。

父 あれでよくはない。あの年になればもっとよく考えるものだ。

アフラ 身から出た錆つて、諺に言っわ。

ハインリヒ そうは言うけど、その諺があてはまらないこともままあるさ。

母(入ってくる。父に) あなた、どうお考えなの？ こんなことになってしまった。こうなることになってたのね。

父 いいや、母さん、こうなることになってたというわけじゃない。

アフラ いったいハインリヒはどうしたらいいのかしら？

ハインリヒ 僕がどうするかだつて？ 思案する必要はないさ 町長のところへ行くよ。で、町長が「この件は放っておけ」と言えば、放っておくし、「取り組め」と言つたら、自分が何をしなくてはならないのかそれもわかっている。

アフラ ハインリヒ、よく考えるのよ。うちの家族全員を不幸にするのよ。

父 ふん、うちの家族か、お笑いじゃないか。町長よりも別の誰かに聞くべきじゃないのかね。

母(父に) あなたって人は日がな一日つかつなことはかり言うのね。私たちはすべてを町長から聞いたのよ。

ハインリヒ（興奮してテーブルをたたく） それはちがう。それは言いがかりだ。事情をよく知らないで、人をとやかく言うてはいけない。

アフラ あなたに言うておくけど 私の方があなたやみんなよりあののことをよく知ってるでしょうよ。だから教えてあげるわ。町長は、もしお母さんが、うちのこのお母さんが、話さなかったら、何も知らなかったのよ。

ハインリヒと父（びっくりして） 本当か、母さん？

（母は泣きながらテーブルに着く。両手で顔をおおう）

ハインリヒ（立ち上がる） さようなら。

父とアフラ 母さん！ ハインリヒが行ってしまっ。

父（命令口調で） ハインリヒ、そこにいろ、今すぐに。

ハインリヒ 僕は出て行くよ。

父 お前はそこに残るんだ それよりも私はこいつを（母を指す） 追い出してやる。

ハインリヒとアフラ でも、お父さん。お母さんを 何てこと。

アフラ お母さんは残るのよ。でも金曜日には町長のところへ行つて 問題を引き起こした人（ハインリヒを指す）は出て行って当然だわ。お母さんではなくて。

母 いいえ、ハインリヒは残るの。私が出て行った方がいいのよ。ここですっかり言うてしまっわ 私でもハインリヒでもない、あのヨーゼフが町長にすべてをざらい洗い 洗いざらい話したの。

ハインリヒ、アフラ、父（驚いて立ち上がり、目を見はる） ヨーゼフが？（また、腰を下ろす）

父 いったいヨーゼフはいつ戻ってきたんだ？

母（泣きながら） 半月前に。

（アフラは泣く。父と母は彼女を慰める）

父と母 アフラ、泣くのはおよし。すべて運命なんだよ。

ハインリヒ（アフラに） びっくりするよな、ヨーゼフが戻ってきたなんて。

アフラ ヨーゼフはもうそれを知ってるのかしら？

ハインリヒ 自分が戻ってきたことくらい、ヨーゼフは知ってるだろう。

アフラ でもいったい誰からそれを聞くのよ、私、それを知りたいわ。

母 お父さん、どうしたの？ 具合が悪いの、お父さん？ 早く、お医者様が衛生功労医の先生を呼んで来て。

父 いや、母さん、もう大丈夫だ。少し眠ればよくなる、もう大丈夫だ。

アフラ ヨーゼフは弁明できないわ。もう親の愛情は受けられないでしょうよ、わかりきってるわ。

ハインリヒ ヨーゼフなんかもう放っておけよ さもないと……

父（立ち上がり、ハインリヒにどなりつける） さもないと何なんだね？ お前、まさか、ヨーゼフが……

ハインリヒ ヨーゼフではない。でもすべてをこ存じの方がおられる、神様だ。

ヨーゼフにまだ心というものがあるならば、自分がどうすべきかわかってるだろっ。

アフラ（ヒステリックに叫ぶ） 悪党、何てあさましいの！ 私がただのふつうの女なら、問題をここまで放っておかなかったでしょう 私だけが知っている、でもお父さんやお母さんのことを思って、口をつぐんでいるのよ。

父（さらに大きく叫ぶ） 黙れ！ 私やお前の女親に気を使うことはないんだ。
ハインリヒ（さらに大きく叫ぶ） アフラをこれ以上、不幸に陥れるなよ、もう十分不幸なんだから。アフラだけがみんなのためを思ってたんだ。

アフラ（落ち着き払って） この家にはもう用はないわ。私は出て行きます。
（去る）

ハインリヒ アフラが行ってしまった 僕も出て行こう。（去る）
父 二人とも出て行ってしまった、私も出て行こう。（去る）

母（父に向かって泣き叫ぶ） お父さん、あなたも出て行くの？ それなら私もここにはもう用はないわ。（去る）

（舞台は空。幕が下りる）